



観光竜王

Sight seeing RYUO

第83号

☆

発行

竜王町観光協会

〒520-2592

滋賀県蒲生郡竜王町小口3番地

竜王町総合庁舎内1F

TEL 0748-58-3715

FAX 0748-58-3730

https://ryuoh.org

e-mail info@ryuoh.org



竜王の宝の資源を活かす



竜王町観光協会

会長 若井 富嗣

新年あけましておめでとうございます。皆さまには希望に満ちた新年をお迎えのことと心からお慶び申し上げます。

昨年は、観光協会に対しまして格別のご支援・ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

昨年春先より規制が緩和され各種事業や行事等が徐々に動き出し、少しずつ活気を取り戻しました。最大事業である「ふるさと竜王夏まつり」も四年振りの開催となりました。実行委員会が中心となり、各種団体や事業所、商店、個人の皆さまから多大な協賛をいただき感謝申し上げます。総踊りには多くの皆さまに参加いただき夏まつりを満喫いただけたものと存じます。

また、打上げ花火も、前回と遜色のない約二〇〇発を打上げていただき多くの方々に歓声とともに楽しんでいただきました。四年振りということでも多くの方々が集中し、入場できなかつた方々が数多くおられたことを真摯に受け止め次回の課題とします。

昨年は猛暑の夏でしたが、事故もなく盛大な夏まつりが開催出来

たことを感謝申し上げますとともに明日への活力を生み出し心に残る真夏の祭典になったことと存じます。

聖徳太子魅力発信事業では、ゆかりの十一社寺での特別大開帳やイベント、特別御朱印の授与を通じて持続可能な観光振興と地域の活性化を目指しました。地元ゆかりの寺院や御堂には三回にわたり首都圏や中京圏、関西圏から多くの仏像や仏閣ファンが訪れ、ゆっくりと鑑賞いただきました。

竜王の自然豊かな歴史や文化、史跡、風景をはじめ、四季折々に因んだ旬の果樹狩り体験は、コロナ禍であっても根強い人気に支えられ、ファミリーや各種グループの来園を通じて観光誘客促進が図られました。また、古くは東山道の宿場町として栄え、源義経が元服したと伝えられる元服池や鏡神社等、歴史が漂う地域を情報発信し観光誘客を目指しました。今年も新型コロナウイルスに留意しつつ、竜王町の観光資源を活かす活動にまい進したいと考えています。

最後に、皆さまにとりまして新しい年が健やかで素晴らしい年になりますよう祈念申し上げます。

石室を持つ古墳が多いわけ



竜王町歴史倶楽部
関川 雅之 氏
(西横関)

竜王町には多くの石室を持つ古墳が見られます。雪野山山頂には国の史跡に指定されている雪野山古墳、山麓には天神山古墳群など、また鏡山の麓には、岩屋古墳、老々塚古墳、オウゴ古墳などがあります。小さいのも入れると合計一〇〇基近くもあるそうです。その中から三つ紹介します。

岩屋古墳（時期…六世紀中頃）
岩屋古墳は三井アウトレットモール東側にある薬師北信号の近くにありません。それも皆さんがよく知っている『前方後円墳』です。でも教科書に載っているような大きな古墳ではなく、小ぶりの古墳です。

現在は岩屋不動尊として、石室（以前遺体を納めていた石の部屋）の奥に彫ってある不動明王が信仰の対象で、周りも整備されており気軽に立ち寄れるところです。元々ついていた石室に

出入りする通路（羨道）はほぼありません。

老々塚古墳（時期…六世紀中頃）
美松台住宅のはずれの林の中に突如老々塚古墳が現れます。古墳の石室は地中に埋まっているのが普通ですが、この古墳はほとんど地表に現れており、石はむき出しになっています。このあたりは昔須恵器の一大生産地だったのでその生産に関わった人たちのだと推測されます。

天神山古墳群（時期…六世紀後半～七世紀初頭、合計二九基からなる古墳群）
川守の龍王寺東側に雪野山の登山道があり、登り初めてすぐに四号墳、五号墳が並んでおり、横穴式石室が開口しています。狭い羨道を通り中へ入ると大きな石室が現れびっくりします。懐中電灯が必需品です。

竜王町に石室を持つ古墳がなぜ多いのか？
勿論、多くの豪族がこの地域にいたこともあるでしょう。しかし、古墳を作るにはその材料となる大きな石が必

要です。それが竜王町には豊富にあったのです。

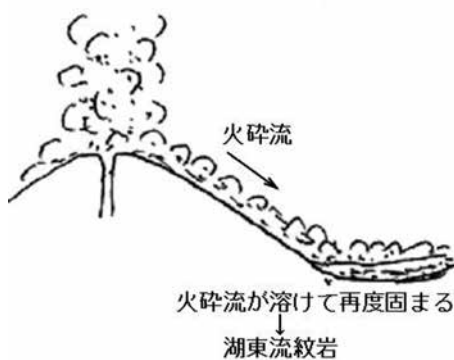
雪野山は「湖東流紋岩（流紋岩質溶結凝灰岩）」という岩石でできています。これは火山によってできた岩石です。火山の火山口から噴出した火山灰や火山ガスが火砕流となって流れ出し、山腹を流れ下りながら周りの岩石などを一緒に巻き込みます。低いところにたまった火砕流は、自身の重さと熱で再び溶け、ゆっくりと冷えて固まりま

す。こうしてできた石が「湖東流紋岩」です。その火山は、東近江市永源寺村葉尾（ゆずりお）町付近だといわれています。当時、富士山くらいの山がこの滋賀県にあったと考えられます。竜王町はその西の端にあたります。今から七千万年前のことです。この「湖東流紋岩」は平面に割れやすい性質（節理）があります。そのため、石室を造るのに適切であったと考えられます。

一方、鏡山は花崗岩からできています。花崗岩は地下深くのマグマがゆっくり固まってできたものです。その後、地殻の変動で地表面に現れたものです。昔、鏡山は花崗岩の石材産地でした。アウトレットパークから二〇分程鏡山の方へ登ると鳴谷池に出会います。そのあたりが花崗岩の石切場でした。

た。今から八〇年以上前のことで、運搬するために掘った隧道（トンネル）の跡が残っています。花崗岩も平面に割れやすい性質があり石室造りに適していたと考えられます。

以上のことを頭に入れながら古墳を訪ねると、また違った見方もできるでしょう。どのようにしてこの大きな石を運んだのだろうか。とか。



善光寺川と長者の石臼
〜近江輿地志略再考

山本 茂氏(美松台)

竜王町には、善光寺川と名付けられた一級河川が貫流している。鏡山を源とし、山沿いを直進、中山道(国道八号線)手前で左折して道を越え右折し日野川と合流。昔、人の手で造成されたものとされるのに、何故か街道でわざわざ左右折しているのか、不思議な形状である。ところで、この川には「長者の石臼」という伝承がある。

それは、善光寺川が古代白鳳期に東近江市小脇郷に住んだ「狛(高麗)の長者」と呼ばれる土地の有力者の末裔が蒲生野の灌漑事業の一環として造った川と伝えられる。長者が信濃善光寺より借りた仏像を石臼の上に置き川の平安を願ひ折ったことが、この川の名の由来とされているのだ。文化三年(一八〇六)江戸幕府が、道中奉行直轄事業として五海道の実態を把握するために作製した絵図「中山道分間延絵図」にも「高麗長者碓」として明記されている。この伝承について江戸時代中期の「近江輿地志略」に詳しい。同書は、膳所藩・藩士の寒川辰清(さむかわときさよ)がまとめた地誌で享保一九年(一七三四)に、一〇一巻一〇〇冊の大作として完成した。近江国全域を対象にした初の本格的な地誌とされている。

原文は下記の通り。
善光寺川の東の堤の下にあり。大きき一圍(いちい/ひと抱え)七尺許、

土際より上に至つて二尺餘、狛長者の石臼なりといふ。善光寺川と號するは、此の臼の上に善光寺の佛を置きたる故といふ。臣按ずる(私が考える)に豊臣秀吉公の時、善光寺の本尊を洛陽(京都)に移し、又返し給ふ事あり(一)。此時此邊にて奇特の事(不思議の印)あり(二)、幸い石臼の様なるものもあれば、旁(かたがた)附會して(こじつけて)言ふなるべし、長者の石臼も心得難し。臣も巡覽の序、此の石を見るに實(まこと)に臼には似たれども極めて臼といふべきにはあらず。底の土に入て甚だ深きは、若し古来の石の鳥居の柱などの自然と土中に埋れしにや訝し。臣が知れる人之を掘り取りて手水鉢にせむと數多の人夫をかけて之を掘れ共其の底を知らず故にやむ(三)。ここに善光寺の佛とは、本一光三尊式阿弥陀如来(善光寺如来)のこと、大さは、四二・四センチメートル、百濟から伝わった日本最古の仏像との伝説を持ち「秘仏」とされている。

一〇世紀後半は、浄土信仰が盛んになった時期で、善光寺聖と呼ばれる僧が御本尊のご分身仏を背負い、全国各地を遍歴しながら民衆の間に善光寺信仰を広めたと伝えられている。戦国時代には善光寺如来は権威の象徴と見なされ、信玄、信長、家康など多くの戦国大名はこぞって自領に如来を遷座させるようになる。特に豊臣秀吉は熱心

で一五九七年(慶長二年)京都方広寺大仏殿の大仏を壊し、安置したのだ。(文中*) 巨大な大仏殿に小さな本尊は不釣り合いのものであった。翌年、秀吉は病に倒れ、民衆はこれを善光寺如来の祟りと噂したため、本尊は信濃に返されることとなる。原文には此の頃のことを「奇特の事」と詳細は語っていない。これは想像だが、近くに

住む長者ゆかりの長老の夢枕に如来がお立ちになり、「信濃への帰路、鏡宿に寄る由、造成されし川の平安を祈りなさい」とでも話されたのではないか。(文中*) つまり筆者は「長者の石臼」の逸話は、過去のどの日でもない、この日だったと決め、事実らしくしたのである。しかも、原文後半(文中*)には「長者の石臼」は石臼であつて石臼ではない「鳥居の柱」だと、見てきたように語っている。たとえ江戸時代とは言え、文中の如き説明を誰が信じただであらう。私が五年前「近江輿地志略」を読んだ時、この件は戯言と思つていた。だが違った。この不思議な逸話には、後述の深い意図があつたの真摯な表現であつたのだ。それは古来より、狛の長者の開発魂と、土地に生きる人々の水への思いが詰まつたこの石臼。これが善光寺如来の台座となり仏の力を注入された。さらに筆者は石鳥居まで想像させることで、神の力も取り込もうとしたのである。彼は石臼

とそれに関わる川造りの伝承を風化させてはならないと考え、後世に残していくことが自身の使命と悟つたのではないか。そのため多くの人々を魅了し続けるドラマチックな名所話に仕立て上げたかつたのだ。それが不思議な逸話の真意と、私は得心している。

令和の今、石臼は持ち主の方々によつて年法要が末永く続けられ、善光寺川の安全を祈念されている。一方、かつて白砂がまぶしい河川敷だった川は砂防事業完了後、定量の流れが確保されたものの次第に荒廃した。だが平成二十一年、「竜王清流会」の皆さんによつて河川環境美化活動が始められ、美しさが保たれている。さらには最近、河岸に花桃を育てる活動も始まつた。有り難いことである。そして今、川は何事もなかつたように囁く如く、静かに流れている。



中山道分間延絵図



近江輿地志略

正光寺を想う



竜王町歴史倶楽部
西田 征生氏
(西川)

西川集落南部に建立されている正光寺山門前に建つ「国寶阿弥陀如来正光寺」石柱は、私が子供のころから見慣れ親しまれた物ですが、現在、阿弥陀如来は国宝ではありません。昭和二十五年に文化財保護法が制定され見直しが行われ、(以前の修理の方に問題があったようで・・・)現在は国指定重要文財となっています。

正光寺の謂れについては、文献がほとんどなく、私は色んな文献や残された資料から推測してまとめたものを紹介したいと思います。

慈雲山正光寺の創建

正光寺は、天正年間(一五七〇年代)に新徳上人が再建されたとあります。しかし、この年代の資料が何も見当たりません。少し年代を下ると、一七二四年に圓浄大律師任職の墓碑が境内に建てられています。また、一七一七年に本尊の阿弥陀如来が寄進

されたとあります。一七二八年には梵鐘が寄進されており、境内の地藏菩薩石造群の中央に建立されている板碑が一七三九年に建立されたとあります。

また、本堂の屋根が一八二六年に葺替えられ、棟の鬼瓦が蓮華紋で作られています。平成二十八年の大屋根修理まで、四隅の下がり棟の鬼瓦十二個はすべて鬼面鬼瓦になっていたことから、棟の鬼瓦も鬼面鬼瓦であったことが推定されます。因みに近江八幡の西光寺は、今もすべてが鬼面鬼瓦で葺かれています。この寺の創建は、江戸時代初期となっています。これらのことを考えると、天正年間(一五七〇年代)に建てられたことが納得できます。

阿弥陀如来立像

ご本尊の阿弥陀如来立像は、南北朝時代(一三三六年〜一三九二年)の作とされており、像高九十五センチメートルの寄木内刳で玉眼を嵌入し、肉身は粉瘤塗、衲衣漆箔施しがあります。台座に墨書があり、これによると夢告によって宗珍居士が近江の国八日市より買得し宗珍六世の孫、青木運平氏が一七一七年(享保二年)に正光寺へ寄進した由を記されています。この

像の特徴は、肉髻(にくけい)が低く、通肩の衲衣の衣摺りは、煩雑で宗様式の影響を受けた作であり、右手を上げ左手を下げていますが、両手の印の結び方が親指と中指で輪を作る下品中生印(げぼんちゅうしょういん)という来迎印を表している特徴があります。今ご本尊の御顔やお姿を拝ませただくと、穏やかで慈しみをもってお参りするものをすべて極楽往生させて頂けるように思います。

国指定重要文化財の阿弥陀如来の謂われや特徴を多くの人に知ってもらい、末永くお守りしていただくことを願うものです。願わくは竜王町の観光地図にも掲載していただきたいと思えます。平成二十八年に檀徒総代として本堂大屋根の大修理をさせていただきました。私にとつて、多くの事を学ばせていただき、寺院や神社の歴史や由来に大きな関心ごととなり、今集落内の歴史遺産の編纂を始めたいです。町内外に関わらずより多くのことが知りたく、竜王歴史倶楽部の一員に加えていただき勉強させていただいています。八十



の手習いではありますが、頑張つて学びたいと思っています。

あとがき

新年明けましておめでとうございます。昨年は色々とお世話になり有り難うございました。本年も宜しくお願ひ申し上げます。

令和六年も早二週間余りが過ぎようとしています。令和二年から三年間、新型コロナウイルスの影響で私たちの生活スタイルが大きく変革しました。しかし、昨年春先以降状況が大きく好転し、ヒト・モノの動きも以前のように戻りつつあります。近隣二市二町や十一社寺、商工会、観光協会が連携した聖徳太子魅力発信事業も今後少々スタイルは変わりますが、引続き情報発信し全国から多くの方々を自然と文化が豊かなこの地に観光誘客を積極的に行い、関連施設への来客を目指した活動を今後も行いますので何卒宜しくお願ひ申し上げます。

(観光協会 事務局)